

## 小松俊雄先生のこと

坂口 光 男

私達が敬愛してやまない小松俊雄先生は、本年の三月一日、めでたく古稀の寿をお迎えになられ、定年により三月末日をもってご退職される。長年にわたる奉職を終えられ、定年により無事ご退職されることは特筆されるに値する。とはいえ、一抹の寂しさを隠すことはできない。

先生は、一九三二（昭和七）年三月一日、高知県安芸市でお生れになった。一九五七（昭和三二）年明治大学法学部をご卒業された後、一九五九（昭和三四）年法学部専任助手、一九六二（昭和三七）年法学部専任講師、一九六五（昭和四〇）年法学部専任助教授、一九七〇（昭和四五）年法学部専任教授となられ、現在に至っている。その間、法学部一部教務主任、法学部学科長、大学院委員、法学部長、評議員、法制研究所所長等の要職を歴任され、本学の研究及び教育の充実・発展のために多くの貢献をされた。また、学外においては、日本海法学会理事、日本弁護士連合会懲戒委員会予備委員等をも歴任された。

先生のご研究は、他の法領域をも広く視野に入れつつ商法の全般に及んでいるが、とりわけ手形・小切手法の分野において先生のご研究の特色が発揮されている。ここで、いくつかのご論稿を紹介させていただくこととする。まず、先生の初期の頃のご研究として、手形行為の瑕疵について考察した論文がある（法律論叢三五卷四・五・六号）。手形行為に瑕疵がある場合の効力については、民法の意思表示に関する規定に従って判断されるが、これを手形法的原

則によつてどのように修正して適用するかということが問題となる。先生は、マニーク (Manick) の意思表示理論から多くの示唆を受けつつ、手形行為は行為者が手形行為であることを認識して署名し相手方に交付することによって成立し、手形の具体的内容についての意思の欠缺または瑕疵は手形行為の効力に影響を及ぼさないと述べ、この観点から民法規定の適用の有無について具体的に検討を加えておられる。代理人が直接本人名義で署名して手形行為を行う署名の代理の法的性質をめぐって、これを本人の手形行為と解する学説と手形行為の代理と解する判例が対立している。学説は、その理由として手形の文言証券性をあげているが、先生は、手形の文言証券性の意味を、手形行為者が誰であるかということが問題となつている場合にまで不当に拡張して解釈されてはならないとし、署名の代理を手形行為の代理と解し、これにより無権代理に関する民商法及び手形法の規定の適用が可能となり、妥当な結論を導き出すことができると述べておられる (法律論叢三八巻五号)。この考えをさらに発展させて、先生は手形偽造の概念を説明しようと試みられた。法学部の民法法グループは、鍛冶良堅教授 (元法学部教授) を代表者として、かねてより法人格なき社團について関心を抱き共同研究を続けていた。研究の基本的視点は、従来の権利能力なき社團理論に飽き足らず、団体に権利の主体性を認めることによつて取引社会の必要に対応しようということにあった。そして、法人格なき団体が「〇〇団体代表者何某」という方式で手形行為を行った場合、手形の文言性との関係において、手形上の権利義務の帰属主体は誰であるかということが問題となる。先生は、法人でない社團等に訴訟当事者能力を認めている民事訴訟法四六条 (現在は二九条) を根拠として法人格なき団体の権利主体性を承認するとともに、右の方式で行われた手形行為を団体の手形行為と解し、その債務は団体自体に帰属すると述べておられる (法律論叢四一卷四・五・六号、私法三〇号)。手形偽造の概念につき、通説は、手形関係においては手形上の記載に従つて効果が決定されるべきであるとし、手形上に代理関係が表示されている手形行為について行為者に権限がない場合を無権代理、

これに対し手形上に代理関係が表示されていない手形行為について行為者に権限がない場合を一律に偽造と解しているが、先生は、手形上の記載によって形式的に無権代理と偽造を区別する通説に対して、渾身の力を込めて鋭い批判を加えておられる（法律論叢四四卷一号）。裏書不連続手形の呈示によって、債務者を遅滞に付すことができるか、また裏書人に対する遡求権を保全することができるかという問題がある。先生は、前者につき、証明すべき実質関係の範囲、裏書不連続の手形の呈示はいつから適法な呈示と認められるか、裏書不連続手形の所持人が実質的権利の証明をなして呈示をしたときのこれに対する支払に善意支払の免責が認められるか、また、後者の遡求権保全のための呈示というためには、裏書の連続する手形所持人という形式的資格による呈示であることを要するか、それとも主たる債務者を遅滞に付しうる呈示であれば足りるかという問題について、きわめて精緻な検討を加えておられる（法律論叢六〇卷四・五号）。実質的には取立委任の目的で、しかし形式的には通常の譲渡裏書の方式でなされる隠れた取立委任裏書の法的性質につき、先生は、資格裏書説は各種の問題について一貫した理論により妥当な結論に達することができるといふことを認められつつも、法律関係は利害関係人の間で相対的に処理されれば足りるとして、新相対的権利移転説を支持しておられる（ジュリスト・商法の争点II、法学セミナー一五八号）。手形上の表示に従って権利の移転を認めながら、表示の持つ意味に限界を画そうというお考えがうかがわれる。

先生は、飛躍した考え、つじつまの合わない言動に対しては、厳しく誠められる。また先生は、決断をするまでは時間をかけられるが、一旦決断を下されたことについては微動だにされない。凜としたその態度には、威厳のようなものを感じる。そのお人柄は学風にも現れている。他方、先生は、一人大海を眺めているという、おらかなお人柄の持主でもある。そのお人柄は、相手の考えの自由を尊重するということに結びついている。しかし、観点を変えるならば、それは自らを厳しく律せよということをも意味している。そのような雰囲気が私達の講座の伝統になつてい

るような感じがする。

私が先生からご指導を賜るようになったのは、一九六五（昭和四〇）年頃である。その当時、法学部の民法法グループでは法人格なき社團についての共同研究を続けていた。私は学生であつたが、研究会の代表者であられた鍛冶教授から勧められて、末席に加えさせていただいた。研究会が夜の遅くまで長引いたので、先生と私は湯島にある旅館に泊まることになった。蒲団に入り消灯をした後にも、私は先生からいろいろなお話をお聞きし、また親しくお話をさせていただいた。眠りに入つたのは朝方であつたように記憶している。私は、先生から、人として、また研究者として何が最も大切であるかということを教えられたような感じがする。

先生におかれては、定年によるご退職後も益々ご壮健でお過ごしされ、高所からわれわれ後進を見守っていて下さるよう、お願いを申し上げて擲筆する。